

動く図書館にまつわる思い出

(元利用者の会・会長より)

人生のターニングポイント

山田芳子

豊中の「動く図書館」が60周年になるという。私の心のなかにさまざまの思いが去来する。

私は昭和39年の春、夫の転勤にともない二人の娘とともに大阪へ来た。最初に住んだ豊中での「動く図書館」は、近所の人と顔見知りにもなり情報の源ともなり、たいへんありがたかった。小学校のPTAとともに、社会的活動の場になったのが岡町の図書館だ。動く図書館の巡回は月に一度ぐらいだったので、本館へ直接出入りするようになり「とよ読書会」を知った。未だに付き合ってる本好きな素敵な友だちがたくさんできたのも、動く図書館を利用したのがきっかけである。

前の古い岡町図書館を知る人も少なくなったことだろうが、昭和40年代初めの読書会は、小学生用の椅子にかけ、「本」の作者について語り、テーマの解釈をめぐる激論をたたかわせもした。新聞社の読書感想文コンクールにグループとして応募、最優秀賞に輝き上京したのも嬉しい思い出の一つだ。初めて関西に移り住み心細い思いのなかで、本を通じて人と関わりを持ち、知的で暖かいコミュニケーションに恵まれたことが、それからの人生のターニングポイントとして働いた。地域に根ざした施策サービスとして、動く図書館の果たした素晴らしい効用を思わざるを得ない。

(施設での利用者より)

「図書館バスとしいの実学園のこどもたち」

しいの実学園 主任保育士 湊暁美

気がつけばいつの頃からか、しいの実学園の毎月の行事予定に図書館バス(動く図書館)の巡回がしっかり入り込んでいる。図書館バスの運んで来てくれるものは、みんなの大好きな絵本だけではない。

図書館バスは、こどもたちの「私はこの本が好き!」「だから、私はこうしたいの!」を育ててくれる。そして保護者の方には「えっ!うちの子、自分の好きな絵本が選べるんだあ・・・」と、気付かなかったわが子の嬉しい一面を伝えてくれる。一緒に通っているお母さん、お父さん、そして職員が、「色がきれいだからどうかしら?絵が大きいから見やすいかな?」とあれこれ心配りして選んだ本だけでなく、様々な本との出会いの中で、地味でも小さくてもこれがいい!と自分でお気に入りの1冊を選ぶ力をつけていく。

図書館バスは、保護者の方たちも育ててくれる。「きょうは私たちが本の当番です。」と事務所に言ってこられるようになると、親子通園を始めて1年くらいは経っている。その頃になると、その保護者の方たちは、少し余裕が出てきて自分のことだけでなく、園全体の親子さんのことを考えて、保護者控え室貸し出し用の本を選ばれるようになる。

ちょっぴりのスペースだけれど、いろいろなものを運び育ててくれる図書館バス。これからも、しいの実の親子さんにどんなものを運んできてくれるのか楽しみである。

(元職員より)

「動く図書館の思い出」

元職員 奥田八重子

図書館勤務となったのは昭和39年(1964)の1月。小中学生室を訪れた子どもの「この本、全部読んでもいいの」と、嬉々とした声が聞かれた頃である。「子どもに本を読む習慣を与えるのは宝物を与えるようなもの」との信念を貫かれた白瀬長茂館長、現在の男女共同参画社会の働く女性のあり方を既に体現されていた中村美代さんら、よき先輩方にも恵まれた。

スタートして13年余の動く図書館は、図書館に遠く、活字に飢えた当時の市民の方々の渴望を癒し、全国的にも注目された取り組みだった。館外奉仕係の仕事で、5人の職員全員が男性。冬の一般成人室で暖房に使う灯油ストーブの上、バケツで沸かされたお湯は、動く図書館車の洗車に使われた。夕闇の雪が舞う中、車を洗う皆さんの姿が今も目に浮かぶ。

異動後、再び岡町図書館勤務となったのは、庄内図書館が新設された昭和50年(1975)。小中学生室勤務の後、館外奉仕団体貸出担当となり、子ども文庫の方々と「子どもと本のまつり」などを始めたのはこの時だった。午前中はとよ3号車で子ども文庫や企業などに配本し、午後は動く図書館車に週に2度くらい乗ったと思う。四季折々の変化の中で豊中のまちを回り、時々街の姿を知ることができたのは貴重な体験だった。

昭和62年(1987)に3度目の岡町図書館勤務時には、館外奉仕係は10人体制に拡充され、男女比も7対3に。図書館全体では、女性が男性を上回る時代となっていた。

図書館サービスを支える「動く図書館」

前 岡町図書館長 谷垣 笑子（現 香芝市民図書館長）

動く図書館がスタートして、早 60 年。人間で言えば還暦で、“随分と長く続けて来れたなあ”と感慨深いものがあります。

私にとって動く図書館は、図書館へ就職して最初に担当した仕事でした。当時（1973 年）、図書館は 1 館しかなく、毎月、110 を超える駐車ステーションを巡回していました。1 日に 5 カ所を巡回するコースもあり、“こんなにも多くの方たちが本を借りに来られるとは！？”というのが正直な思いでした。今でも本を探す時の子どもたちの嬉しそうな姿が目には浮かびます。仕事に喜びとやりがいを感じ、2 年という短い期間でしたが、館内業務では体験できないことを一杯もらったように思います。図書館職員は一度は担当し、経験すべきだと思っています。

16 年ぶりに館外サービス係に戻ってきました。この時期は、庄内、千里、野畑図書館など施設が増えるとともに、少子化の影響もあって子どもたちの図書館離れが問題になっていました。そのため、財政危機や行政改革のもとで“動く図書館はもういらぬのではないか”という意見があり、図書館の一部にもありました。担当係長として苦しい時期で、係の職員も辛い思いをしたと思いますが、かえって私を支えてくれました。

雨や雪、どんなに暑い日でも、動く図書館を待ってくださるお年寄りや子どもとそのお母さんたち。そういう市民の方こそ大切にしなければという思いとともに、図書館車の機動力を活かした新しいサービスとして、学校や保育所、障害児通園施設等への巡回を始めました。本と出合った子どもや支える人たちの喜びに感動し、動く図書館の素晴らしさと大切さをあらためて感じたものです。これからも、市民の「声なき声」を大切に、身近な図書館として地域に出向き、きめ細やかな図書館サービスを続けてくださることを心から願っています。